

宇都宮市域の石材産地を探る（追録）

池田 貞夫（宇都宮市文化財調査員）

はじめに

前号の徳次郎石研究会活動成果報告書2021(令和3)年度において、筆者は宇都宮市域の石材産地の概要を報告したが、その後の調査で古賀志石の存在を確認できたので、今回追録として当該石の採石場跡や歴史、用途などについて報告する。また、新里雨乞山石についても追跡調査の結果、規模の大きい採石場跡を確認できたので、概要を報告する。なお、古賀志石は高遠石工と関係が深く、本書において柏村祐司氏が「下野の高遠石工」と題し、中川博夫氏が「高遠石工と野州石造文化」と題し詳細な内容を報告しているので、それらを参照していただきたい。

1 古賀志石

古賀志石は古賀志山（標高582.6m）の南東方向に位置する、黒石山（標高295m）の中腹（南西側）から採石された石材である。宇都宮大学名誉教授酒井豊三郎氏によると、古賀志山は足尾山地などとともに、中世代（地質年代）の約2億年前の地層で、一方黒石山付近は約1800万年前の地層と考えられるという。近隣の大谷石の地層が約1500万年前とされており、それよりは古い地層ということになる。採石場跡は現在、大きな岩が横たわり近辺に残石が散在している。古賀志石は岩石の種類としては、火山の噴出物が水中に落下して集積・凝結した「凝灰岩」に属するが、細分類すると「細粒の火山礫凝灰岩～砂質凝灰岩」になる。

古賀志の歴史に詳しい池田正夫氏によると、採石が始まったのは江戸時代中期頃で、以後昭和10年代まで続いたという。ちなみに、古賀志町日吉神社の鳥居は黒石山の石材を利用した最も古い石造物で、額東裏面に正徳4年（1714）の年号が陰刻されている。江戸時代、旅石工として全国に出向いた高遠石工（現長野県伊那市高遠町出身の石工）が、古賀志村にもやって来て一部が同村に定住し、古賀志石を採石、加工した。高遠石工が手掛けた石造物は町内各所に現存しており、古賀志石の加工場跡や高遠石工末裔の屋敷（北條家）も残っている。

当該石は神社の鳥居や灯籠、狛犬、手水鉢、石宮などに加え、寺院の宝篋印塔や無縫塔、民間信仰の石仏、供養塔などに利用された。石造物の多くは造立当時の姿を留めており、年号や石工の銘も比較的多く残っている。材質としては、大谷石や徳次郎石などに比べやや硬いことから、石蔵などには不向きであったと思われる。



写真1. 古賀志石採石場跡



写真2. 古賀志石加工場跡と高遠石工末裔の屋敷



写真3. 古賀志石サンプル



写真4. 古賀志日吉神社鳥居



写真5. 日吉神社狛犬



写真6. 弘蔵院跡無縫塔

2 新里雨乞山石

新里雨乞山石の採石場跡については、前号において雨乞山（標高333m）南側の中腹で、跡地1ヵ所を確認したことを報告した。その後継続調査を行ったところ、南東側斜面の標高220m～240mの谷沿いに、別途規模の大きい採石場跡を探し当てた。当該採石場跡の両側は、大きな岩が連続して林立しており、かつてこれらの岩を垂直に切り落として石材にした様子が窺えるほか、辺り一面におびただしい数の残石が散乱している。また、谷に沿って石積み跡が残るほか、石を加工、集積するための平坦な敷地跡も残っている。採石場跡を見る限り、かつて大量の石が採石、加工、出荷されたものと考えられる。

当該産地の石は凝灰岩ではなく、「角閃石デイサイト」という比較的硬い岩石である。



写真7. 雨乞山



写真8. 雨乞山の急斜面と採石場跡

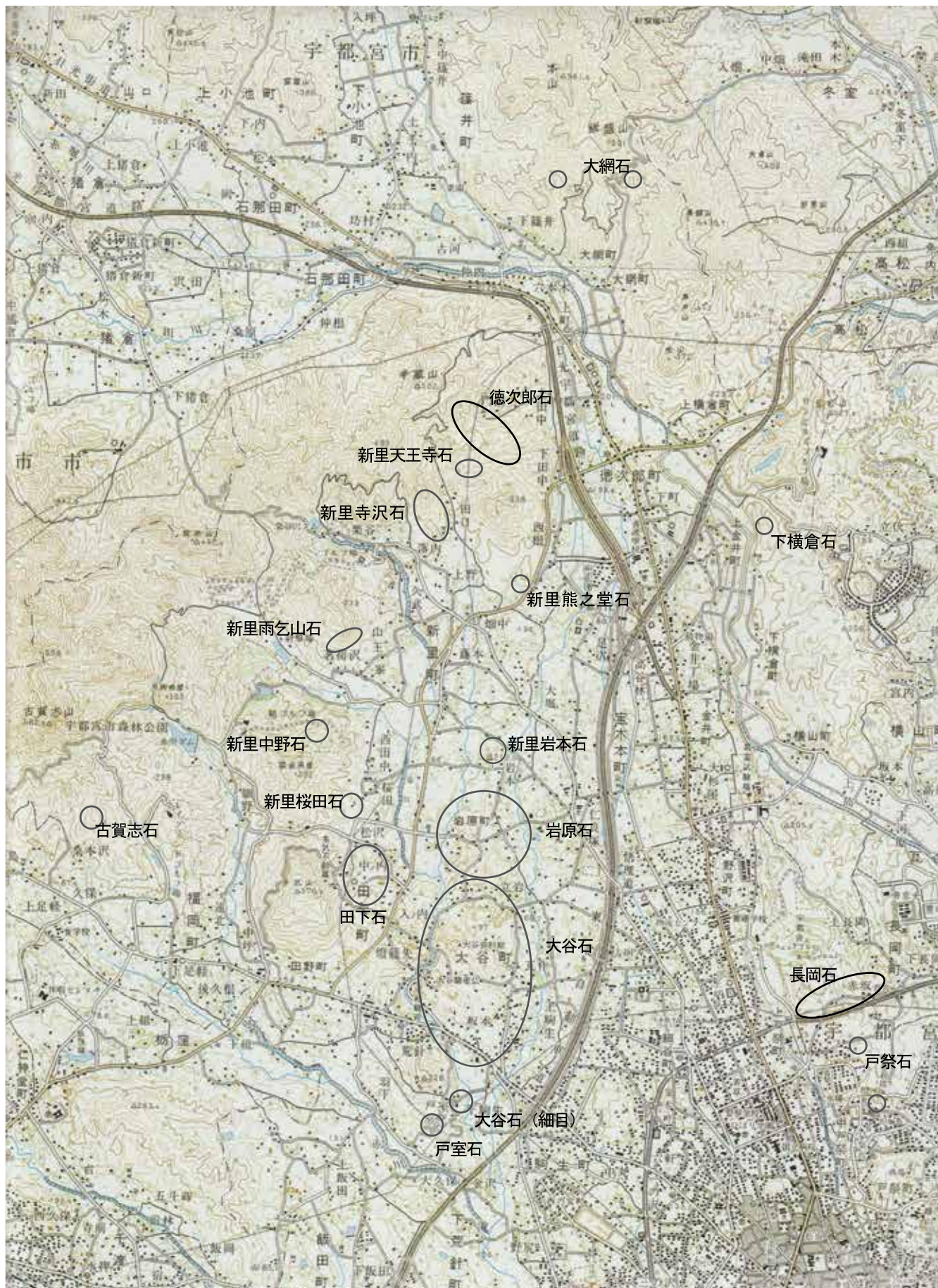


写真9. 採石場跡と残石の散乱状況



写真10. 切り出した石の残石

宇都宮市域の石材産地分布図



注1：石材産地分布図は令和5年1月現在のデータ

注2：地図は国土地理院5万分の1地形図（矢板・宇都宮）を利用